

イエスが御自分の死と復活を予告する場面は三度ある。マルコ福音書によると一度目は〔マルコ 8:31〕、二度目は〔9:31〕、そして三度目は〔10:33~34〕。

一度目と三度目には「祭司長、律法学者ら」によってという説明があるが、二度目の予告は簡素に「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する(9:31)」とだけ語る。

言葉が少ないだけに掘っていく範囲は限られる。権威者(8:31)や権力者(10:34)のことは脇に置き、広くではなく狭く焦点を絞って、御言葉を聴き取りたい。

「人の(anthrōpou)子は人々に(anthrōpōn)渡される」とは一種の掛け言葉だが、イエスの姿を如実に表している。

「人の子」とは旧約聖書では「人間」の意味だが、イエスは御自分を「人の子」と称す。キリストは神であることに安住せず、「人の子」として人々の間を歩かれた(フィリピ 2:6~7)。

風変わりなラビではあったが、気取ったところはまるでなく、ずけずけ語り、どんどん癒し、虐げられた者と寝食を共にし、神の愛を具体的に示した。この愛の現れは多くの人を目覚めさせ、群衆の熱狂による変革を恐れた者たちに殺された。

神の愛がこの地上に現れる威力とその危険さに、誰もが圧倒された。

「弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった(マルコ 9:32)」。意味は分からないが「怖さ」はひりひり感じた。

「三日の後に復活する(9:31)」ことは希望なのに、それについてなぜ尋ねないのか。一度目の予告もほぼ同じ言葉だったが(8:31)、ペトロは復活ではなく、殺されることに耳を奪われてイエスを抑えようとした(8:32)。そして「サタン、引き下がれ(8:33)」と厳しく叱責された。

弟子たちも私たちも「神のことではなく、人間のこと(8:33)」が気になってしかたないのだ。

「人の子は、人々の手に引き渡され(9:31)」。「引き渡され」とは受動形、能動形で「引き渡す」のは誰か。神だ、神が人の子を「死」なる人々に引き渡す。だが弟子たちは怖れのあまり、死に引き渡される方の「復活する」という言葉が耳に入らず、「神のことを思わず、人間のことを思っていた(8:33)」。

弟子たちはイエスの教えや奇跡に感銘を受け、出家してまで従って来たが、受難予告あたりから師への信仰が怪しくなり、「怖くて尋ねられなく(9:32)」なる。

先頭に立って平然とエルサレムへ向かうイエスとは対照的に「弟子たちは驚き、従う者たちは恐れ(10:32)」、いっそう腰が引けていく。

何者かが預言者に告げる。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる(エゼキエル 2:1)」。「自分の足で立て」とは何の比喩か。

「彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた(2:2a)」。霊が能動で人間が受動だが、この受動こそ「自分の足で立つ」という能動。

聖霊を受け、私たちも自分の足で立ち、自分から「語りかける者に耳を傾ける(2:2b)」。すると、どうだろう。「主は言われた(2:3)」と語り手が神であると認識し、歩むべき方向が明確になっていく(2:3)。

聖霊に助けられて、私たちは「怖くて尋ねられない(マルコ 9:32)」ことをも聞く。「人の子は～殺されて三日の後に復活する(マルコ 9:31)」。

「復活する」という希望だけに限らない。「殺される」十字架は私たちを赦し、清め、贖う救いの業であり(ロマ 6:5~7)、聖霊によってキリストが私自身の事となる(8:11)。



#### 《おまけのひとこと》

霊が「自分の足で立たせる(エゼキエル 2:2)」 霊に助けられてでは「自分の足」ではない という反発があるか もとより霊と私は不可分(ロマ 8:11) 霊は御手の創造を 私において徹底させる深い「息」